

あとがき

人類が初めて月面に足跡を残して以来、わが国のプラネタリアムは年に10館前後の勢いで増えてきました。施設の数ではプラネタリアム大国というべき状況を呈していますが、国民のどれほどが宇宙の探求の価値を見いだしているのでしょうか。

技術という面では世界的な水準にあるわが国ですが、プラネタリアムは、天文学を文化として推進させるロケットであると言えるのではないのでしょうか。

そのロケットの操縦者やナビゲーターが、プラネタリアンと呼ばれる人々です。若い世代の心を宇宙に導くのが、優れたプラネタリアンが操縦するプラネタリアムなのです。

この資料は、これからのプラネタリアムのために、実際勤務にあたっているプラネタリアンが中心となって作成されたものです。公にされたものとしては、この種の資料は日本では初めてではないかと思われます。

そのため、制作は手探り状態で始まり、実際に使えるものを、公平な視点にたったものを、これからのプラネタリアム界のためになるものを...と全員で何でも話し合い、形になったものです。

この「教育のためのプラネタリアム」は、対象を社会教育・学校教育目的のプラネタリアムに限っています。今後、総轄的なプラネタリアム設置の基準が作られていくことと思いますが、それらのたたき台となっていければ幸いです。

上記の後書きから、5年がたち、プラネタリアムをとりまく状況は一変しました。大型プラネタリアムが次々開館していった時代はもはや過去の話となり、現在ほどのプラネタリアムも人員の削減、経費の見直しなど、厳しい運営をせまられています。

この5年の間に、インターネットなど個人・家庭の単位で利用できる情報メディアは著しい進歩をとげ、プラネタリアムまで足をのばさなくても、様々な天文学の情報が得られるようになっていきます。その一方で、自然環境を大切にする意識が広く市民に芽ばえ、ヘール・ボップ彗星の際の消灯キャンペーンに見られるような私たちに関係の深い光害対策も、環境庁の指針に盛り込まれるまでになってきました。

研究に携わる側からもパオネット(公開天文台ネットワーク)など天文学の最新情報をプラネタリアムなどの施設に積極的に配布する仕組みが動き始め、プラネタリアム職員が行う天文情報の収集、公開に機能し始めています。

このような情報公開時代に、適切な設備と人材の確保をどのように訴え、進められるかにこれからの施設運営もかかっているように思えます。

プラネタリアム設備も、もちろん進化しており、CGを前面に押し出した新システムが複数提案され、CGのみで投影される星空をもつプラネタリアムも日本に誕生するに至りました。しかし、新設、既設のプラネタリアム施設が急速に進む時代の波に追いついていないのかは、非常に不安です。常に時代を先取りした機能整備と運営をこころがけ、時代に取り残されることのないよう、願わずにはられません。

これからの時代、プラネタリアムはどういう方向に進むべきなのか、プラネタリアムの存在意義と、真の実力がためされることになりそうです。

1998年3月31日
天文教育普及研究会
プラネタリアム・ワーキンググループ
およびプラネタリアム関係者有志